

韓国三国時代の金銅如来立像の図像再考

— 右手に宝珠を持つ如来立像を中心に —

関 丙 贊

日本語訳 篠 原 啓 方

一、序 論

韓国に初めて仏教が伝来したのは、今からおおよそ一七〇〇年前、西紀三七二年（高句麗・小獸林王三年）である。当時の韓半島には高句麗、百濟、新羅の三国があり、これらはそれぞれ地政学的な条件に伴う国家形成過程の差により、国家の性向や統治体制に違いが見られた。その違いは仏教受容における過程にも現れている。新羅では高句麗（三七二年）や百濟（三八四年）より一五〇年余り遅れた五二八年に仏教を公認したが、この際、高句麗や百濟では王室など支配階層がまず仏教を受容したのに対し、新羅は被支配階層がまず受容し、僧異次頓の殉教という大きな迫害の後、王室など支配階層に広がった。つまり、高句麗と百濟の仏教が王室から民衆へと徐々に広がったのに対し、新羅は民衆の間で仏教が広がり、やむを得ず王室でこれを公認することになったのである。こうした公認過程における相異性は、礼拝の対象である仏像にも見られ、注目される。すな

わち高句麗や百濟の仏像では、中国の北魏や東魏、そして北齊、北周へと続く北朝様式系列の仏像が主流をなすのに対し、新羅では北朝系列の仏像とともに、当時の高句麗・百濟の仏像には見られない大変独特な像が作られた。

これらの像は童顔で、当時の如来像に見られない偏袒右肩の着衣法をとり、右手に宝珠を持った像である。また左の膝をほんの少し曲げて右の臀部を横にぐっとひねり、全体的に大きく屈曲した三曲姿勢を取っている。さらに法衣は、当時の高句麗・百濟仏によく見られる北魏様式系列のもよりのずっと薄手で体に密着し、そのため身体の輪郭が透けて見える。こうした容姿を持つ像は、現在までに計一六軀が見つかっているが、すべて小型の金銅仏で、六世紀末から七世紀前半ごろにかけて、比較的短期間に集中して作られた。この一六点のうち、出土地が確かなものは六点であるが、すべて新羅が領域を大きく拡大する以前の地域から出土している。⁽¹⁾ 出土地不明の残りのものも、七世紀前半ごろの新羅の仏像様式にのっとっている。したがって、偏袒右肩の着衣法を取り右手に宝珠を持つこの独特な

仏像は、新羅で作られた、七世紀前半ごろの新羅仏像様式のひとつの典型をなしていることがわかる。

これらの仏像については、以前から右手に宝珠を持つ点が最も重要であると認識され、七世紀前半の新しい形式の薬師如来とされてきた⁽²⁾。この像に関する記録や銘文が皆無で、一般的に持物を有する如来像は薬師如来のみであるという点から、深く考察されないまま薬師如来と命名され⁽³⁾、その後これが一般化してしまっているようである。しかし薬師如来は、通常右手でなく左手に、そして宝珠ではなく薬壺を持ち、図像として定立した時期も八世紀中半以降である。そのため単に宝珠のみをもって薬師如来だと断定するには多少無理がある。

そうすると、偏袒右肩で腰を一方にひねって右手に宝珠を持つ、三国の中でも新羅地域でのみ出土するこの独特な形式の金銅如来像の図像は何なのであろうか。またその起源はどこにあるのであろうか。まずこれまでに知られている一六点についてその様式を考察し、次に東アジアにおける薬師如来の図像成立過程、そしてこの新羅金銅仏の図像と起源について考えたい。

二、偏袒右肩執宝珠金銅如来立像の時期区分

前述のように、これまで知られている偏袒右肩の執宝珠金銅如来立像は全部で一六点になる。この数は、実物が確認できない個人所蔵品や論文で引用されただけの作品を含めたもので、今後真偽が明らかになるにつれ、若干の変動も考えられる。

これらは六世紀末から七世紀半ばまで、つまり半世紀という比較

的短い時期に製作されたものであり、編年を試みるのは困難である。しかしいくつかの点を基準に、やや強引にはあるが時期区分を行うと、おおよそ三期に分けることができる。この一六点は、頭と顔、身体の比例、そして台座の形態などはすべて当時の新羅仏像に一般的なもので、その変化も明確でないため編年基準とはなりにくい。したがって本稿では、この仏像の最大の特徴のひとつである腰を右に大きく屈曲させた三曲姿勢、そして衣文の形式化の有無などで編年を試みた。まず外来的要素を最初に受容した生硬な容姿を持つ導入期、新羅仏像と融合し様式的に完成していく絶頂期、そして形式化が進み徐々に衰退していく衰退期の三期に区分した。

(1) 導入期（Ⅰ期）

この時期の仏像としては、宿水寺址から出土した二軀の官能的な金銅如来立像が挙げられる（図1、図2）。宿水寺は統一新羅時代以前に創建された寺で、早くから新羅の領内となつたいまの慶尚北道荣州市順興面内竹里にあるが、朝鮮時代にこの場所に書院を建てて紹修書院と命名し、それが現在にいたっている。一九五三年の調査で、金銅仏二五軀がこの宿水寺址から見つかったが、一軀は新羅、あるいは統一新羅時代のものであることが明らかにされている。⁽⁴⁾

その新羅時代とされるもののうち三点が、偏袒右肩で宝珠を持つ金銅如来立像である。これらは腰を大きく屈曲させ三曲姿勢を取っているが、そのうち官能的な姿勢を取る二点がこの時期にあたる。二点はすべて、顔と台座などは当時の典型的な新羅仏像の様式であるが、その一方で薄い法衣を偏袒右肩し、体に密着させて腰と両脚の屈曲を強調しており、たいへん官能的である。こうした官能的な

姿勢は、仏像後面にもそのまま表現されている(図3)。二軀ともに保存状態は良好で、流麗な造形を一層高めている。宿水寺址で出土した他の仏像とは明確に異なり、どちらかといえば非常に生硬な印象を与えるこの二軀の如来立像は、偏袒右肩の着衣法という新たな外来要素を初めて受容し、従来の仏像に適用させたため生じた結果と考えられる。新たな形式が最初に導入される際しばしば見られる現象と言えよう。

鑄造技法は、当時最も一般的だった、内部まで完全に銅をこめたムクとしている。おおよそ七世紀初めの製作と推定されるが、単弁の反花座の格好と、帽子を深くかぶっているかのような肉髻、そして外来要素をそのまま反映した官能的な三曲姿勢などから、六世紀末までさかのぼる可能性もある。

(2) 絶頂期(Ⅱ期)

皇竜寺址から出土した像をはじめ、偏袒右肩執宝珠形式の金銅如来立像で、最も優れた国立中央博物館所蔵の仏像が、この絶頂期のものである。

一九七六年から八三年までに八回にわたって行われた皇竜寺址の全面発掘調査の際、木塔址の東で見つかったこの仏像(図4)は、頭部にくらべ肉髻がたいへん大きく、頭部全体に魚子文によって螺髪を表現している。発見当時は頭部が取れていたが、保存処理の後、これを付着した。他の仏像と同様、右腕を長く伸ばし、腰のすぐ下で宝珠を持っている。しかし左腕は一般的な像とは異なり、上膊と下膊を直角にし、大衣の先をつかんでいる。このように衣を手でつかんだ像は、韓国では統一新羅時代初期の作である皇福寺址三層石

塔出土の純金製如来立像(図5)が一点伝わるが、インドのクシャーン王朝やグプタ王朝期の仏像によくある要素である⁽⁵⁾。先の導入期の仏像とは異なり、法衣に衣文が刻まれており、衣がやや厚みを増している。また従来の官能的姿勢を離れ、腰のみをやや右にひねった姿勢を取っている。衣文はたいへん写実的かつ流麗に表現され、彫刻の完熟美を見せている。

国立中央博物館所蔵のいくつかの偏袒右肩執宝珠形式の金銅如来立像のうち、最も秀麗な仏像がこれである(図6)。冥想にひたったように目を細く開き、口もとに微笑をたたえる童子のような表情である。肉髻は横に広く広がり地髪部との区別が曖昧で、身体にくらべ頭部が大きな四等身比例となっている。顔は直六方体を連想させる角ばったもので、この四角い顔は七世紀前半ごろから登場する典型的な新羅仏像の顔で、慶州拝里三尊石仏(図8)や国立慶州博物館所蔵の金銅半跏思惟像頭部(図9)にもよく現れている。全体的に顔と胸、そして腕などには、丸みを帯びた美が感じられる。やはり右手を伸ばし、腰の下で宝珠を持っており、左手は施無畏印を示すように手のひらを外側に向けて広げている。左肩から左手にかけてかけられた法衣は、柔らかな質感がよく表現されている。しかし前面に施された衣文は、等間隔で線刻され写実性に欠ける。その半面、皇竜寺像と同様、衣の先が風になびくように反転し、動きのある表現が見られる。導入期の像にくらべると、厚みのある法衣にさえぎられて下半身があまり表現されていないが、かすかに左脚の膝を曲げ、三曲姿勢を作っているのがわかる。背面にも法衣と衣文を正確に表すなど、造形の完成度が大変高い逸品である(図7)。

着衣法は偏袒右肩で、右手に宝珠を持つ典型的な偏袒右肩執宝珠

形式であるが、三曲姿勢は以前の像とは違い形式化が進んでいる。官能的な三曲姿勢が消え、ただ意識的に腰だけをひねり、三曲ではなく直立に近い二曲姿勢である。七世紀前半ごろの典型的な新羅仏像の特徴である直六面体の顔を持ち、二曲姿勢を取るこの仏像は、偏袒右肩に執宝珠という外来の形式が七世紀前半ごろ、新羅仏像と完全に融合し、新たな形式の仏像が誕生したことを示す好例である。絶頂期に当たる像は、前述の二像以外にも国立中央博物館所蔵の金銅如来立像をはじめ、数点がある(図10、11、12、13)。

(3) 衰退期(Ⅲ期)

偏袒右肩、執宝珠の金銅如来立像は、約半世紀という比較的短期間で登場・消滅し、変化の時期がたいへん早い。最初の官能的な三曲姿勢はやがて二曲姿勢へと変化し、さらに直立姿勢へと変化する。しかし右手を伸ばして腰部のあたりで宝珠を持つ姿と、偏袒右肩の着衣法を取る点には変化がない。この衰退期にあたる像も、偏袒右肩で宝珠を持つ形式は維持されているが、立ち方は完全な直立となり、衣文は図式化して数条の平行斜線となっている。国立中央博物館所蔵の金銅如来立像をはじめ、これまで知られている執宝珠形式の仏像のうち、過半数がこの衰退期にあたる。

なかでも国立中央博物館所蔵の金銅如来立像(図14)は、他のものが一〇センチ前後であるのに対し二二センチと大きく、耳目口鼻のつくりもはっきりしており、顔の微笑や後面の彫刻をしつかり作りあげた、造形性に優れた作品である。しかし偏袒右肩と執宝珠という点を除くと、姿勢はほぼ直立で、衣文は平行斜線の反復であり、法衣の先の反転もかすかに表現されているにすぎないなど、図式化

の傾向が明白である。この衰退期にあたる他の金銅如来立像も、すべてまっすぐに立つ直立姿勢を取っているが(図15、16、17、18、19)、偏袒右肩に宝珠を持つ形式を除けば図式化が進んでおり、作品としての出来はあまりよくない。こうした偏袒右肩執宝珠如来立像は、およそ七世紀中葉ごろを最後に、新羅では作られなくなった。一方日本では、新羅の影響を受け七世紀後半ごろに偏袒右肩の執宝珠金銅如来立像(図20)が製作されているが、衰退期の様式の影響を受けたようで、直立姿勢を取っている。

これまで発見された偏袒右肩の執宝珠金銅如来立像をまとめると、表1のようになる。

番号	名称	所蔵	規格(㎝)	出土地	形式	備考
一	金銅如来立像	国立中央博物館	一七・三	慶尚北道榮州市順興面宿水寺址	I	図1
二	〃	〃	一四・八	〃	〃	図2
三	〃	〃	一七・一	〃	〃	図10
四	〃	国立慶州博物館	一七・五	慶尚北道慶州市皇竜寺址	〃	図4
五	〃	国立中央博物館	三〇・五	伝小倉 collection	〃	図6
六	〃	東京国立博物館	一三・六	〃	〃	図11
七	〃	〃	一二・〇	ソウル市城東区興国寺	〃	図12
八	〃	国立中央博物館	一二・八	慶尚北道義城郡比安面	〃	図13
九	〃	国立中央博物館	一一・八	〃	〃	図15
一〇	〃	〃	一二・六	〃	〃	図14
一一	〃	大和文華館	一二・八	〃	〃	図16
一二	〃	国立中央博物館	一四・二	〃	〃	図17
一三	〃	慶北大博物館	一一・一	〃	〃	図18
一四	〃	国立中央博物館	一四・八	〃	〃	図19
一五	〃	日本個人	九・〇	〃	〃	〃
一六	〃	円光大博物館	一〇・三	〃	〃	〃

三、薬師如来の図像検討

如来像のうち、持物を有するのは薬師如来像が最も一般的であるため、偏袒右肩で宝珠を持つこの如来立像も、単純に薬師如来と命

名された。だが東アジアにおいて、薬璽を持つ薬師如来像は、いつから製作されたのであろうか。まず薬師経の漢訳と薬師信仰の流行について考えてみたい。

薬師如来は、サンスクリット語のバイシャジャ・グル(Bhaiṣajyaguru)の漢訳で、東方の浄琉璃浄土世界の教主として万病を治癒し、すべての煩惱を取り払い、また無知の病をも癒すという、人間の生活全般に利益を与える如来である。こうしたことから薬師如来は大医王仏とも呼ばれるが、現世利益的で呪術的性格が強く、民衆の中に深く溶け込み、特に韓国と日本で広く信奉された。薬師如来の所衣經典である薬師経には大きく二つある。薬師如来のみを説いた『一仏経』と、薬師如来を含む七仏を説いた『七仏経』である⁽⁶⁾。

学者によつて若干差はあるが、中国で薬師経はおおよそ四回漢訳されたと考えられており、その最初のものが、劉宋(五世紀中葉)の慧簡が漢訳した『灌頂経』である。次に隋大業十一年(六一五)に達摩笈多が漢訳した『薬師如来本願経』は、誤訳が多く民衆に広く伝わらなかったとされている。続いて玄奘が唐永徽元(六五〇)年に訳した『薬師琉璃光如来本願功德経』が、現在一仏薬師経の基本とされておき、広く伝播して薬師信仰の流行を招いたとされている。さらに、薬師琉璃光如来とともにその他の六如来の功德を説いた『七仏経』が唐神龍三(七〇七)年、義浄によつて『薬師琉璃光七仏本願功德経』として漢訳された⁽⁷⁾。

『薬師経』は、世尊(釈迦)がバイシャリーの楽音樹下で会衆に説いたとされている。すなわち文殊菩薩が諸如来の名号とその本願の説法を願うと、世尊はまず、仏国土の彼岸には、東方のガンジス川にある砂粒の一〇倍と同じ数の琉璃光という世界(浄琉璃浄土)があ

り、そこに薬師如来が住むと説いた。次に、薬師如来が菩薩だった時代に立てた十二の誓願(薬師十二願)を挙げ、さらにその仏国土の功德莊嚴を説き、その仏国土は阿弥陀の極楽世界と同等であるとした。これによつて薬師信仰は、少なくとも阿弥陀信仰が流布した後⁽⁸⁾に成立したことがわかる。次に脇侍の代表として日光、月光両菩薩の名を挙げ、さらに薬師如来の名号の聞名得益(名を聞いて得る利益)が記されている。次に薬師如来の供養法とその功德、救脱菩薩による続命法、王の七難と王国安穩の法、九横死などが語られ、最後に十二神将の守護宣言がある。この經典は比較的短いものであるが、全体を通じ、薬師如来を信奉し、その名号を聞いて憶念することと得られる現世利益が強調されている。薬師如来は「薬の先生」という意味であるが、単なる病氣平癒ではなく、人間の生活全般に利益をもたらす仏としての性格を有している。それは『七仏経』においても同様である。

薬師如来の彫像と画像がインドで見つかっていないことや、その信仰の存在を積極的に示す資料が現存していないため、インドにおける薬師信仰の存在を否定的に見る研究者も多い。『薬師経』そのものが中国における偽作だとする説も早くから出されている⁽⁹⁾。しかしその梵語原典が辺境ではあるがインドで見つかっている点や、七々八世紀の学僧サンティデーヴァ(santideva)の『大乗集菩薩学論(Sikṣasamuccaya)』にも引用されている点などから見て、インドにおいても薬師信仰は存在したものとみられる。その後薬師信仰は中央アジア、チベット、中国、韓国、日本などの北方大乘仏教圏で広く流布し、人気を得た。

しかしこのように四回にわたつて漢訳された『薬師経』には、薬

師如來の容姿に関する具体的な説明はなく、少なくとも義浄による最後の漢訳がおこなわれた唐神竜三（七〇七）年までは、薬壺を持つ薬師如來の図像は確立していなかったものとみられる。薬師如來の形状について具体的に記した最初の經典は、八世紀中ごろの不空（七〇五―七七四年）による漢訳『薬師如來念誦儀軌』一卷である。「中心に薬師如來像を安置し、如來は左手に薬器を持っている。これを無価珠とも言う。右手は三界印を結ぶ⁽¹²⁾」という内容があり、八世紀中葉以降になつてはじめて薬師如來が左手で薬器を持つ図像として定着したものとみられる。この薬器を持つ薬師如來像は、インドでは一点も見られず、中国では唐代の八世紀ごろの金銅仏に数点があるが、そのほかの如來像にくらべ相対的に小さめで、図像の成立も遅かったものと思われる⁽¹³⁾。

一方、薬師如來と関連し、敦煌石窟に注目すべき壁画がある。それは敦煌莫高窟第二二〇窟にある薬師浄土变相図で、題記によつて唐貞観一六（六四二）年の絵であることが分かっているが、ここに七仏薬師が描写されている（図21）。そのうち左から2番目の如來が左手に薬壺を持っている（図22）。この絵は義浄が訳した七仏薬師経でない一仏薬師経によつて描かれたもので、薬師図像の始原であることを示している⁽¹⁴⁾。薬師如來が左手に薬号を持つ図像は、この絵に始まるのではないかと思われる。七世紀中ごろから敦煌を中心に薬壺を持った薬師如來が登場しはじめ、八世紀中ごろにいたつて中国で一般化し、これが八世紀中葉に不空が漢訳した『薬師如來念誦儀軌』の流布とともに加速化したものと思われる。

一方、韓国では七世紀前半ごろに薬壺を持つ薬師如來像が登場しており注目される。百済の故土である忠清南道泰安の磨崖三尊仏

（図23）のうち、左の如來立像が左手に薬壺を持っている（図24）。ここには記録がなく正確な年代は不明であるが、様式から見て七世紀前半ごろの製作と思われる。全般的に中国の斉周様式に忠実で、左手に薬壺を持ち、後に流行する薬師如來の図像と正確に一致している。この製作年代が確かであれば、現存する薬師如來の図像のうち、最も早いものとなる。しかしこの仏像を除くと、左手に薬壺を持つ如來像は一点もなく、八世紀中葉ごろになつて一般化する（図25）。

以上、薬師如來の漢訳と図像に関する記録、そして中国と韓国における薬師如來の登場について総合的な考察を試みた。これらから見ると、左手に薬壺を持つ薬師如來が一般化するのには、八世紀以降であると理解できる。従つてこれより一〇〇年以上前に作られた新羅の偏袒右肩執宝珠金銅如來立像を薬師如來だと推定するのは多少無理がある。さらに、一点だけではあるが七世紀前半ごろにすでに正確な図像を備えた薬師如來像が出現している点からみて、右手に宝珠を持つこの仏像を、薬師如來とするのは難しい。

この金銅如來諸像の特徴は、宝珠を持っている点だけでなく、當時としては非常にまれな偏袒右肩の着衣法である点、腰を一方に大きくひねつた三曲姿勢を取っている点を見過ごしてはならないだろう。

四、起源と図像

では、こうした形式を有する如來像の起源はどこにあるのであろうか。伝来したものであろうか、あるいは新羅で独自に発生したも

のであろうか。現在まで、インドや中央アジア、中国、東南アジアといった仏教文化圏で、右手に宝珠を持つ如来像は、一点も見つかっていない。ただ、前述のように、日本で白鳳時代に製作された仏像が一点伝わるのみである。東京国立博物館の法隆寺献納宝物一五二号の金銅如来立像(図20)が、右手に宝珠を持ち、偏衫をまとっているが偏袒右肩の着衣法をとっている。腰をひねらず、直立に近い姿勢である点からみて、衰退期の偏袒右肩執宝珠新羅仏像の影響を受けて製作されたものと考えられるため、こうした如来像の起源に関わる仏像ではない。右手に宝珠を持つ如来像の起源を明らかにする仏像は、現在まで知られていないのが実情である。

ところで、実物ではないが、右手に宝珠を持つ如来像に関する記録があり、注目される。法顕の『仏国記』には、獅子国、つまり現在のスリランカで宝珠や摩尼珠が多く産出するという事実とともに、当時獅子国の代表的な寺院だった無畏山寺に、右手に無価宝珠を持つ青玉如来像が主尊として安置されているとある。⁽¹⁵⁾ この記録が事実であれば、スリランカには少なくとも五世紀代に右手に宝珠を持つ如来像があつて礼拝されていたことになり、この宝珠を持つ如来像は、南方の地域と関係があることがわかる。

また宝珠と合わせて、新羅如来像の重要な特徴のひとつが偏袒右肩である。韓国の三国時代の仏像は、ほとんどが中国、特に北方仏教の影響を受けており、通肩や中国化した厚い礼服を法衣としてまとっているが、これらの如来像のみが一樣に薄手の衣を右肩に着るのである。

本来仏像の着衣法は、三衣(僧伽梨、罽多羅僧、安陀会)のうち一番上に着る僧伽梨(大衣)の着用法で大きく二つに分かれる。ひとつは

両肩をおおう通肩、もうひとつは右肩をあらわにし、左肩のみおおう偏袒右肩である。通肩は師が弟子に会う時や、外出時に用いる着衣法で、偏袒右肩は弟子が師に仕える時や敬意を示す際に行うものである。⁽¹⁶⁾ よって厳密には、仏像が偏袒右肩の着衣法をとるのは誤りであるが、これにとらわれず地域によって異なる着衣法が行われたことは、初期のインド仏像からも知りうる。比較的気候の寒冷なガンダーラ地域では通肩の仏像が、温暖なマトウラ地域では偏袒右肩の仏像が多く製作されたが、これは初期の法衣着用が經典の規定にもまして、気候や地域的特色に合わせ適用されたことを示している。この通肩・偏袒右肩については、研究者によって若干の見解の差はあるものの、おおよそ通肩は北の中央アジアから、偏袒右肩は南インドから、東南アジアを経て中国に伝わったと考えられている。⁽¹⁷⁾ このように偏袒右肩は温暖な南インドと東南アジアを中心に流行した仏像の代表的な着衣法のひとつであった。したがって三国時代のほとんどの仏像が通肩であるのに対し、薄い偏袒右肩を着用するこの如来像は、それがいかなる経緯であれ、南インドや東南アジアなど、南方仏教圏と結びついていたのであり、右手に宝珠を持つている点はその可能性をさらに高めている。

一方、『三国遺事』にも新羅が六世紀後半ごろ、海路によってインドと交流したという記録がある。これには、新羅最大の寺である皇竜寺の金堂に安置された釈迦三尊仏を製作するため、その雛形となる三尊仏と仏像の材料を、船舶を使ってインドから輸入したという。⁽¹⁸⁾ このように、船でインドと直接交流したという記録は、当時の百済や高句麗にはなく、新羅が唯一海路によって直接インドと仏教文化交流を行っていたことを示している。この際、おそらくスリランカ

を中心に南方の仏教文化圏にあった、宝珠を持ち、偏袒右肩の南方系の仏像がともに伝来したものと推定される。

したがって偏袒右肩で右手に宝珠を持つこの独特な形式の如来像の起源は、南インドやスリランカといった南方仏教文化圏にあり、この南方仏教文化圏と海路による直接交流を通じて新羅に入り、約半世紀もの間、流行したものと考えられる。

だとすれば、この如来像の尊名は何であろうか。銘文記録もなく、仏教經典にも右手に宝珠を持つ如来像の尊名が記されておらず、現在としては断定しがたい。また薬師如来である可能性も、製作時期と持物を持つている手の位置からみて、ほとんどなさそうである。ただ宝珠を持つ新羅如来像の起源が南方仏教と関連するものであれば、釈迦如来である可能性が最も高いと思われる。その理由は、多仏主義を主張する北方仏教（大乘仏教）とは異なり、南方仏教（小乗仏教）が釈迦牟尼のみを仏とする一仏主義であるためである⁽¹⁹⁾。したがって、右手に宝珠を持つ無畏山寺の青玉如来像も、釈迦如来であったと思われる、また南方仏教の影響を受けて誕生したと推定されるこれらの新羅如来像も、釈迦如来として製作されたと思われる。これは、六世紀後半から七世紀前半までの新羅仏教が、主に釈迦と弥勒信仰を中心に展開し、記録上においても釈迦仏と弥勒仏のみが製作された事実が、その可能性をさらに高めている。

五、結論

以上、薄手の偏袒右肩の着衣法をとり、右手に宝珠を持ち、腰を大きくひねるやや不自然な三曲姿勢の金銅如来立像における、その

起源と図像について論じてきた。この如来像は、韓国でも新羅でのみ作られたもので、当時の高句麗や百済、さらにインドや中国でも見られない新羅の独特な像であった。

従来、如来が持物を有するという理由だけで薬師如来と命名されてきたが、八世紀中ごろから普遍化する薬師如来図像の出現時期と、薬師如来が左手に薬壺を持つのは異なり、右手に宝珠を持つ姿勢から類推すると、薬師如来である可能性は低いと思われる。

これらの仏像と直接比較できる仏像は、現在どの地域から見つかっておらず、その起源を求めるのは困難であった。しかしスリランカの無畏山寺の主仏が右手に宝珠を持っているという法頭の『仏国記』の記録により、南方仏教文化圏にその起源がある可能性を指摘した。つまり宝珠を持つ新羅の金銅如来立像は、一様に南インドやスリランカ、東南アジア各地の仏教と関連のある薄手の偏袒右肩であり、南方仏教文化圏との関連性が高い。これらの像は、新羅が南インド、東南アジアと海路を使った文化交流を行う中で、南方仏教の影響を受けて新羅で形成された仏像様式であり、尊名は釈迦如来と推定される。仏教の經典では、しばしば宝珠そのものが仏舍利を意味し、この仏舍利はすなわち釈迦如来を意味するため、宝珠を持つ釈迦如来は図像的に見てもさほど無理はなからう。

【注】

- (1) 慶尚北道榮州市にある宿水寺址から三点、慶州の皇竜寺址から一点、慶尚北道義城郡の比安面では一点、ソウル市城東区にある興国寺から一点が見つかっている。
- (2) 金春実「三国時代の金銅薬師如来立像研究」『美術資料』第三十六号、国立中央博物館、一九八四、七頁（韓国文）。
- (3) 金載元「宿水寺址出土の仏像について」『震檀学报』一九、一九五八、一七頁（韓国文）。
- (4) 金載元 前掲書。
- (5) 金理那「皇竜寺の丈六尊像と新羅の阿育王像系仏像」『震檀学报』四六・四七号、一九七九、二〇七―二〇八頁（韓国文）。
- (6) 中村元編『岩波仏教辞典』、岩波書店、一九八九、八〇四―八〇五頁。
- (7) 永井信一「中国の薬師像」『仏教芸術』第一五九号、一九八五、四、四九―六二頁。
- (8) 田島德音訳『国訳一切経経集部十二』、大東出版社、一九三二、二九九―三〇一頁。
- (9) 薬師経は早くから僧祐が『出三蔵記』巻五新集偽撰雜録第三に「淮頂經一卷、一名薬師瑠璃光經、或名淮頂拔除過罪生死得度經、右一部宋孝武帝大明元年秣陵鹿野寺比丘慧簡依經抄撰」として疑偽経説を提起した。つまり慧簡の抄撰と東晋（帛尸利蜜多羅訳）の仏説大淮頂神呪經第十二拔除過罪生死得度經が同じであるため、本経もまた疑偽経だとするものである（田島德音訳 上掲書、三〇〇頁）。
- (10) 田村元編 前掲書、八〇四頁。
- (11) 新井慧蒼編『仏教・インド思想辞典』「薬師経」条。
- (12) 安中心一薬師如来像如来左手令執薬器。亦名無価珠。右手令作結三界印（大正新脩大藏經）第一九卷 密教部二 No.九二四A、大正新脩大藏經刊行会、一九六三、二九頁）。
- (13) 中国の薬師像のうち、銘文から年代を知りうるものは、北魏時代（孝昌元年銘、五二五）までさかのぼるものもある。しかし薬壺をもつ像は隋代以降現れる。伊東史朗氏は松原三郎氏の『中国仏教彫刻史研究』所載の図版で、薬壺を持つ像のみを挙げているが、それら六点のうち一点は隋代で、残りは唐代の金銅仏である（伊東史朗「薬師如来像」『日本の美術』二四二、一九八六、二二頁）。

一方薬師仏は敦煌莫高窟に集中して残っており、塑造のものではなく

絵画のみである。これら絵画の遺品は薬師浄土変相図と薬師仏画に分けられるが、その数を表にすると次のようになる。

	隋	初唐	盛唐	中唐	晚唐	五代	計
薬師浄土変相	4	2	6	20	28	14	74
薬師 仏	6	3	34	81	51	7	182
合計	10	5	40	101	79	21	265

（『敦煌莫高窟内容総録』敦煌文物研究所一九八二年による）

表からもわかるように、六朝時代以前の薬師仏はなく、隋代以後登場し、中唐以降急激に増加している。

一方図像は晩唐まで一定の形式を持たず、様々な印相を示し、五代になると左手に薬壺を、右手には錫杖を持つ薬師仏として定型化するという（永井信一 前掲書、四九―六二頁）。このように、中国においても、薬師如来の図像が成立するのは遅い。

塚本善隆の「竜門石刻録」によって竜門石窟の在銘像を分類すると、薬師仏は全部で一点あり、このうち紀年を持つものは三点に過ぎない。少なくとも敦煌のような辺境でない中国中心部では、薬師信仰がかなり弱かったことがわかる（町田甲一、「法隆寺金堂薬師像の擬古作たることを論ず」、『国華』第九五一号、一九七二、一〇）。

- (14) 伊東史朗「薬師如来像」『日本の美術』二四二、一九八六、二三頁。
- (15) 法顯『仏国記』第三八章

「一僧伽藍、名無畏山寺、有五千僧、起一仏殿、金銀刻鏤、悉以衆宝、中有一青玉像、高二丈許、通身七宝焰光、威相嚴顯、非言所載、右掌中有一無価宝珠……」（金春実 前掲書、二二頁）。

- (16) 逸見梅栄『仏像の形式』東出版、一九七五、三二八―三三四頁。
- (17) 金春実 前掲書、一九頁。
- (18) 李載浩訳『三国遺事』二 塔像篇「皇竜寺丈六」条、二〇〇二、二八頁。
- (19) 中村元編 前掲書、六二八頁b。

（ミン ビョンチャン 韓国国立中央博物館学芸研究官）
（しのはら ひろたか 韓国・高麗大学校大学院博士課程）



図3．図2の背面



図2．金銅如来立像、慶尚北道榮州市宿水寺址出土、高14.8cm、新羅6世紀末－7世紀初、国立中央博物館所蔵



図1．金銅如来立像、慶尚北道榮州市宿水寺址出土、高17.3cm、新羅6世紀末－7世紀初、国立中央博物館所蔵



図6．金銅如来立像、高30.5cm、新羅7世紀前半、国立中央博物館所蔵



図5．純金製如来立像、慶州市皇福寺址出土、高14cm、統一新羅690年頃、国立中央博物館所蔵



図4．金銅如来立像、慶州市皇竜寺址出土、高17.5cm、新羅7世紀前半、国立慶州博物館所蔵



図10. 金銅如来立像、慶尚北道榮州市宿水寺址出土、高17.1cm、新羅7世紀前半、国立中央博物館所蔵



図8. 拌里三尊石仏、慶州市拌洞、高275cm(本尊)、新羅7世紀前半



図9. 金銅半跏思惟像頭、高8.3cm、新羅7世紀前半、国立慶州博物館所蔵



図7. 図6の背面



図13. 金銅如来立像、高12.8cm、新羅7世紀前半、国立中央博物館所蔵



図12. 金銅如来立像、高12cm、新羅7世紀前半、東京国立博物館所蔵



図11. 金銅如来立像、高13.6cm、新羅7世紀前半、東京国立博物館所蔵



图16. 金銅如来立像、高12.8cm、
新羅 7 世紀中盤、
大和文華館所藏



图15. 金銅如来立像、ソウル城東区興
国寺出土、高13.8cm、新羅 7 世
紀中盤、国立中央博物館所蔵



图14. 金銅如来立像、高22.6cm、
新羅 7 世紀中盤、
国立中央博物館所蔵



图19. 金銅如来立像、高10.3cm、
新羅 7 世紀中盤、
圓光大博物館所蔵



图18. 金銅如来立像、高14.8cm、
新羅 7 世紀中盤、
国立中央博物館所蔵



图17. 金銅如来立像、高11.1cm、
新羅 7 世紀中盤、
慶北大博物館所蔵



図22. 図21の細部



図21. 薬師浄土变相図、
敦煌莫高窟220窟、唐642年



図20. 金銅如来立像、法隆寺献納宝物
152号、高30.5cm、白鳳時代7世
紀後半、東京国立博物館所蔵



図25. 金銅薬師如来立像、高29cm、
統一新羅8世紀中盤、
国立中央博物館所蔵

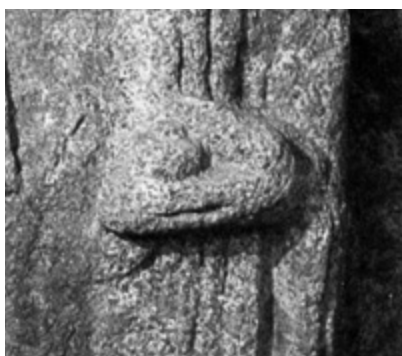


図24. 図23の左如来立像の細部



図23. 泰安磨崖三尊仏、忠南泰安、
高240cm(左如来)、百濟7世紀初

〔編集後記〕

本号に掲載される八篇の論考のうち三篇は館外からご寄稿いただきました。

神戸大学の黒田龍二氏と石田理恵氏には、東大寺大仏殿の江戸再建に関わる重要資料である建地割板図を、紹介をかねてご考察いただいております。当館では平成十四年度開催の特別展『大仏開眼一二五〇年 東大寺のすべて』に際し、神戸大学建築史研究室に同図の縮尺図の作製をお願いし会場に展示する機会を得ましたが、今回その成果を踏まえてご寄稿頂いた次第です。

韓国国立中央博物館の金有植氏と関内贊氏には、平成十五年三月八日に当館で行われた国際研究集会（平成十二～十四年度科学研究費助成金基盤研究（B）（2）『日本上代における仏像の荘嚴』の一環として開催）において研究発表をしていただいております、今回その発表内容に基づき執筆をお願いしました。（T）

〔編集〕

岩田 茂樹

谷口 耕生

〔英文翻訳〕

マイケル・ジャメンツ

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雑集

第六号

平成十六年三月三十一日発行

編集発行

奈良国立博物館
奈良市登大路町五〇番地

印刷

株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地

A RECONSIDERATION OF GILT-BRONZE BUDDHAS OF THE THREE KINGDOMS PERIOD IN KOREA, FOCUSING ON THE STANDING BUDDHA HOLDING A JEWEL IN ITS RIGHT HAND

MIN Byoungchan

National Museum of Korea

Many images of gilt-bronze standing Buddhas (Sks., tathāgata) in a rather unnatural posture, bent awkwardly at the waist with right shoulder exposed and holding a jewel in its right hand were produced in the first half of the seventh century in Silla. These images are peculiar to Silla and are not seen in other countries in the same period. On the basis of the hand-held attributes, the Buddhas have been called images of Baiṣajyaguru, but considering the period of the first appearance of the Baiṣajyaguru iconography and the fact that the works hold a jewel in their right hands, it is unlikely that they were meant to be Baiṣajyaguru.

There are no extant images that might be directly compared to this unique iconographic type, but given the accounts that the main Buddha of the Abhaygiri in Sri Lanka held a jewel in its right hand, and that in each of these works the right shoulder is exposed, an attribute linked closely to the Buddhism of South Asia, it is clear that their origin is in the cultural sphere of Southern Asian Buddhism. In other words, it may be assumed that Silla, plying the sea routes to Southern Asia, carried out cultural intercourse with the South and that this Buddhist iconographic type was influenced by South Asian Buddhism but created in Silla. It can also be surmised that the image is that of Shakamuni.